

質の高い盲導犬を1頭でも多く 新たな視点で、訓練士・職員が一丸となって



視覚障害者にとって良質な盲導犬とは？ 1頭でも多く効率的に訓練するには？

当協会が常に持つ課題です。

日本盲導犬協会は、基本理念の構築、具体的な施策、科学的アプローチ、情報のデータベース化など、すべての分野で職員が新たな視点でこの課題に取り組んでいます。



質の高い盲導犬の育成と 安定供給

中期計画のビジョンの一つ「盲導犬50ユニット安定・安心計画」は、盲導犬を希望する視覚障害者が長期間待つことなしに、盲導犬ユーザーになることを示しています。このビジョンを実行するためには、一定数の盲導犬を継続して育成し、視覚障害者に貸与することが必要です。

ただし、数を増やすだけでは意味がありません。それは、当協会が育成する盲導犬は、ユーザーにとって良質な盲導犬でなければならないからです。

質の高い盲導犬の3条件

「質の高い盲導犬」は次の3つの条件を満たしているものと考えます。

第1は、「安全で快適な歩行をするための情報を安定的にユーザーに提供できる」こと。

第2は、「人間社会のルールに従って生活ができる」こと。

第3は、「健康である」こと。

この3つを持った盲導犬の育成を、当協会は目指しています。

第1は、盲導犬の主な3つの仕事、「角を教える、段差を教える、障害物をよける」を、どんな状況でも正確に安定的に実行できる技能を身につけていることです。さらに道路や駅、電車、店舗など、いろいろなシチュエーションで危険を察知し、ユーザーに正確かつ安定的に情報を提供し安全に導くことが求められます。

次に「人間社会のルールに従って生活ができる」

ですが、ユーザーとともに外出するときも、仕事を終えて家でくつろいでいるときも、盲導犬は常に人間社会の一員として暮らしています。

特に仕事をしていないときは、一般の家庭犬と同じ視覚障害者のパートナーとして生活をします。盲導犬は最高の家庭犬として、ともに楽しく暮らすことができることが求められます。

最後の「健康であること」は、人にとっても盲導犬にとっても大切なことです。健康でなければ仕事を遂行することはできませんし、楽しく暮らすこともできません。また、犬の医療費はユーザーの大きな負担にもなります。

当協会では、繁殖・出産からパピー時代、盲導犬時代、そして引退し最期の日まで、常に適切な健康管理を行っています。

年間50ユニット貸与が目前に

良質な盲導犬の育成は、当協会だけでなく、すべての盲導犬育成団体の目標です。同時に、こうした盲導犬を継続して安定供給することが重要な課題となります。

当協会ではこの難題克服のため、常に中長期の計画を立て、さまざまな取り組みや挑戦を行ってきました。

直近の「中期3か年計画(2015年度～2017年度)」では、年間50ユニット(ユーザーと盲導犬で1ユニット)を安定的に育成する計画を作成。右図のように盲導犬の育成工程を7つに分け、それぞれの分野で目標を設定し、その実現に向けて切磋琢磨してきました。

たとえば「訓練技術向上工程」では、訓練技術向

上を図り、「盲導犬訓練工程」では、訓練期間の短縮と盲導犬育成成功率のアップを目指しています。さらに「共同訓練工程」「繁殖・出産工程」「パピー工程」「ケネル・医療工程」「アフターケア工程」など、それぞれの工程でクオリティーアップを行ってきました。（詳細は第3章第2節123ページ）

育成分野以外でも、「事業基盤の強化・安定計画」「現場力向上と次世代育成計画」を行い、目標の実現を目指してきました。これは、すべて良質な盲導犬を安定的に育成するためです。

2016年度は、年間46ユニットの貸与を達成し、年間50ユニット貸与に向け着実に歩んでいます。今後は、この数値の安定的な維持が当面の目標になります。

当協会は、良質な盲導犬を安定的に育成し続けるためには、経験値や勘に頼るのではなく、科学的な研究・分析が必要で、常に新しい視点を持つことが大切と考えます。当協会は、盲導犬育成を科学的に分析し、各工程・分野のクオリティーアップに役立てています。



繁殖からパピー期の育成

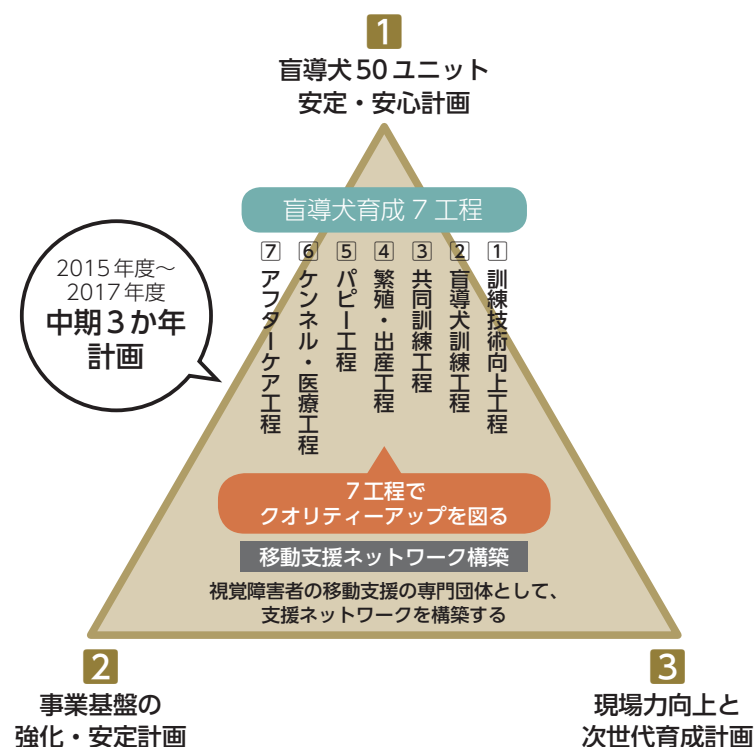
盲導犬は訓練士が訓練すれば育成できるものではありません。盲導犬の育成・訓練にはさまざまな工程がありますが、当協会では「犬訓練部門」「ケネル部門」「医療部門」「繁殖・研究部門」「共同訓練部門」「ユーザーサポート部門」の6つの部門が、それぞれ部門ごとの仕事を行い、かつ連携しながら良質な盲導犬の育成を目指しています。育成工程の流れをまとめたものが、「盲導犬育成・訓練工程フローチャート」です（45ページ）。「後工程はお客さま」「前工程に正確なデータの報告」をモットーにしています。工程間・部門間の有機的かつ相互信頼が良質な盲導犬につながります。

盲導犬成功率のアップが不可欠

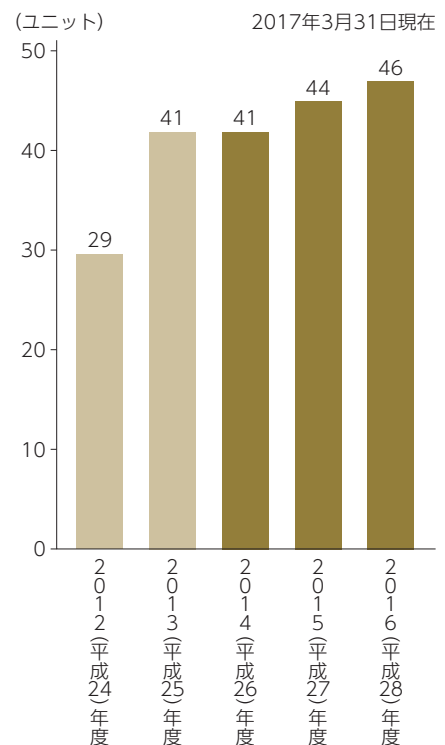
現在、一定の繁殖計画に基づいて生まれた子犬のうち、最終的に盲導犬としてユーザーに貸与される犬は、一般的に3割から4割といわれています。これが「盲導犬成功率」です。

単純に考えれば、50頭の盲導犬を育成するには、訓練犬だけで125頭から170頭が必要です。一時期、180頭の子犬を生ませ、早期の訓練評価

盲導犬育成 7 工程



ユーザーと盲導犬のユニット数の推移



による訓練の効率化を目指しましたが、繁殖犬の維持、仕事量、訓練密度など課題が出てきました。

そこで、当協会が取り組んだのは、盲導犬成功率のアップです。年度内盲導犬成功率を指標としました。

年度内に盲導犬(Q犬=Qualified: 資格要件を満たし、資質・能力のある)、繁殖犬、キャリアチェンジ犬とキャリアが決定した犬を「年度内訓練犬」とし、盲導犬成功率は「盲導犬数÷(年度内訓練犬-繁殖犬)×100%」で算出します。

この盲導犬成功率を上昇させるために、繁殖、出産、パピー育成、訓練、そして医療など、さまざまな分野で当協会独自の取り組みを行ってきました。つまり中期3か年計画でいうところの盲導犬育成7工程、一つひとつの精度を上げていくことで、最終的に成功率50%を目指すという考え方です。

こうした取り組みの効果は、盲導犬成功率にしっかりと反映しています。2011年度(平成23年度)は3割を切っていた盲導犬成功率が、2014年度は40.6%、2015年度は42.7%、2016年度は44.7%と着実に上昇しています。

繁殖は科学的視点で

これまでの実績やデータによって、盲導犬になれるかどうかは、その犬の遺伝的な資質が大きな意味を持つことがわかっています。このもともと持っている資質を「^{ひんせい}稟性」といいます。稟性は、成長過程における訓練や学習の段階でもほとんど変わらないと考えられています。また、組み合わせの結果が出るまでに交配してから2年～3年かかります。盲導犬は3歳頃になって初めて、盲導犬としての正確な評価が定まるからです。繁殖から育成、訓練へ至る工程において、過去の科学的なデータを集め、分析することで、それぞれの工程でのポイントを探し出し、それを実際の作業に当てはめていく必要があります。

つまり、繁殖は、盲導犬の育成にとって、そして盲導犬成功率を上げるためにとても重要な分野です。これは競走馬の世界に似ているかもしれません。

繁殖には血統の維持、盲導犬成功率の高い交配組み合わせの模索、受胎率の向上を考えるブリーディングと、交配技術、出産技術、産後の育児技術であるリプロダクションがあります。

ブリーディングでは、まず盲導犬に適した稟性を持つ親犬を繁殖犬に選ぶことが重要です。現在、当協会には繁殖犬として、オス犬が16頭、メス犬

が34頭があり、繁殖犬飼育ボランティアに飼育されています。当協会のすべての犬は、繁殖犬を中心に家系図が作られており、データベースで繁殖犬の交配記録、子犬の盲導犬成功率、稟性、病歴データが蓄積されています。また、盲導犬成功率に関係する因子の発見、交配組み合わせの研究に取り組んでおり、2017年(平成29年)2月、全国盲導犬施設連合会主催の盲導犬育成ジャパンセミナーで「稟性の傾向分析」を発表しました。また、アジア・ガイドドッグス・ブリーディング・ネットワーク(AGBN: Asia Guide Dogs Breeding Network)が推し進めている育種価を利用した「盲導犬合格率向上システム」の構築にも参加しています。

繁殖犬の頭数は、別表(46ページ)のとおり順調に確保でき、国際盲導犬連盟(IGDF: International Guide Dog Federation)のいわゆるIGDFスタンダードに沿って出産できる頭数を達成しています。しかし、将来にわたって繁殖を維持するためには、常に新たな血統の導入が必要です。オス、メス双方の繁殖犬を外部から取り入れること、特に海外との協力関係を維持していくことは不可欠で、アメリカ、イギリス、フランス、チェコなどとの関係構築を進めています。

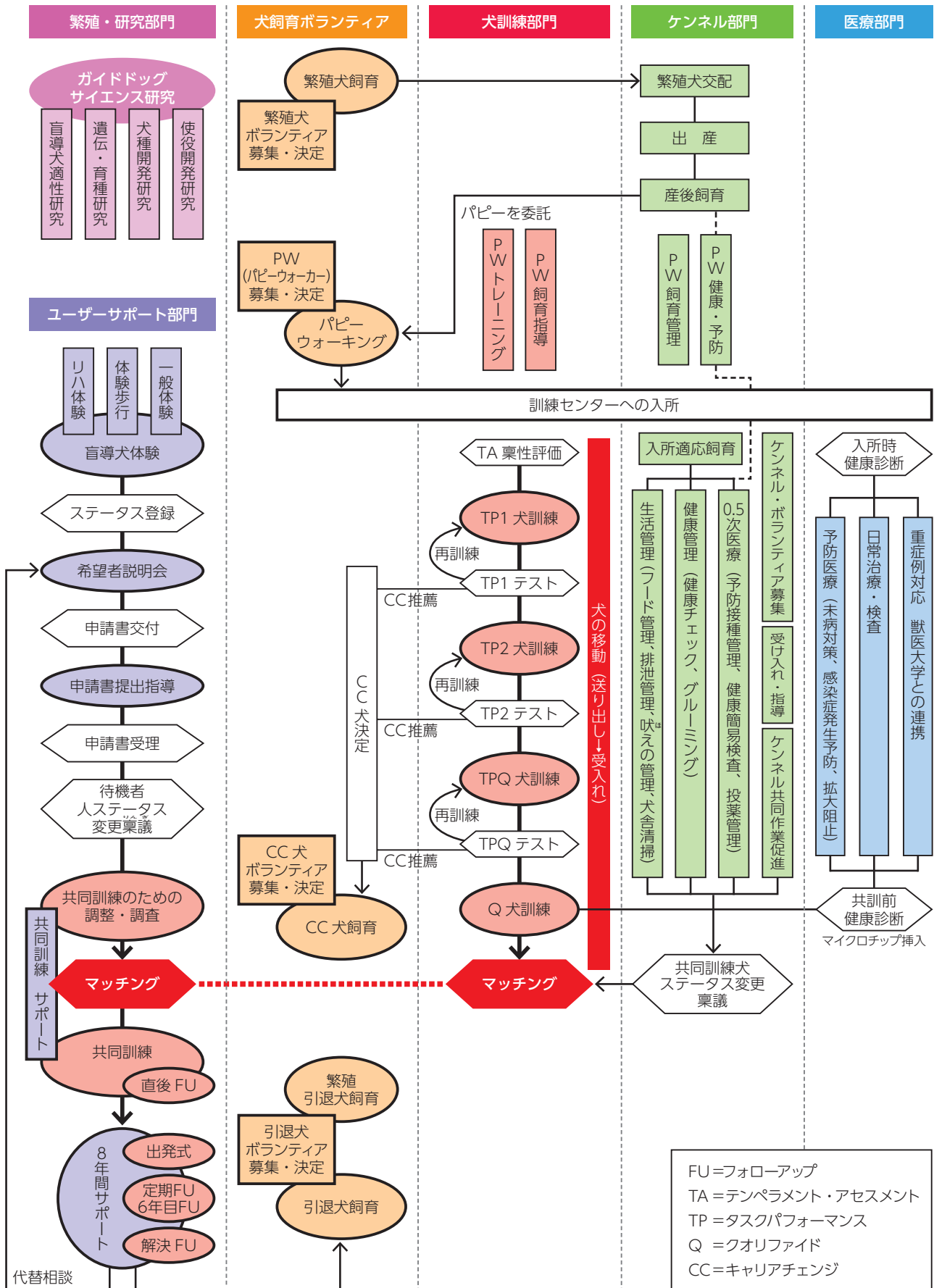
また、凍結精子作成技術、交配技術も習得し、精子の冷凍保存による人工授精もすでに始めています。当協会が保有する凍結精子は約70頭、約4,600ストローです。

リプロダクションとは、産前・出産・産後からパピーウォーカーに子犬を出すまでの約2か月間の親子の育て方のことです。かつては繁殖犬飼育



凍結精子のストローを液体窒素タンクの中に保管しています

盲導犬育成・訓練工程フローチャート



ボランティアによる自宅出産をお願いしていましたが、今はほとんど富士ハーネスで行っています。ここには、出産助産経験を積んだ多数の職員とすぐに駆けつけてくれる委託獣医師がいます。

出産予定日の2週間前にボランティア宅から富士ハーネスに移動します。そして、出産後45日前後でボランティア宅に戻るまでの母体管理、安全に出産させる技術、生まれた子犬を健全に成長させる技術がリプロダクションの大切な技術です。

以前は生まれた子犬を識別するために色の違うリボンを首に巻いていましたが、今は赤と青のマニキュアを生まれた順に、首・背中・尻……と塗って性別と出産順が一目でわかるようにしています。これで、リボンが首に絡みつくことがなくなりました。こんな小さな工夫から栄養学に基づいた飼養技術など飼育技術が蓄積されています。

もう一つ、将来盲導犬成功率を左右する技術が

あると考えています。犬の前期社会化期で、自分が犬であることを認識する時期です。たくさん触れられた子犬、親からたくさんめられた子犬が精神的に安定した犬になると考えられていますが、さらに進んで盲導犬になるための前期社会化期には何をいつどの程度どのように体験したらいいかを研究しています。こうした研究を、当協会は獣医系学部を持つ大学と一緒にを行っています。

現在、ブリーディングは神奈川訓練センターで、リプロダクションは富士ハーネスが担当しています。1年間で20回前後の出産があり、120頭前後が生まれてきます。その中から、55頭がQ犬・盲導犬となり、8～10頭が繁殖犬になっていきます。

なお、富士ハーネスが開設され11年目に入りますが、この間、151回の出産があり、1,012頭の子犬が生まれました。ようやく、繁殖センターとしての機能が充実してきました。

繁殖犬頭数の10年間推移（各年3月末頭数）

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
オス	11頭	13頭	12頭	11頭	10頭	10頭	14頭	14頭	16頭	16頭 (2～8歳14頭)
メス	14頭	16頭	16頭	9頭	15頭	22頭	27頭	31頭	33頭	34頭 (2～6歳30頭)
合計	25頭	29頭	28頭	20頭	25頭	32頭	41頭	45頭	49頭	50頭 (適期犬44頭)

2日目

出生から2週までを新生子期といい、目は開いておらず、外耳道もふさがっています。触覚など母犬の乳首を探しあてるための一部の感覚しか機能していません



14日目

13～20日頃を移行期といい、外耳道が開き、音に反応するようになります。よちよちと歩きだし、きょうだい犬とのじゃれ合いが始まります



33日目

4週齢からおおむね13週齢が社会化期（前期）です。好奇心と警戒心が共存します。「自分は犬である」という所属動物種に関する思い込みが形成される時期でもあり、母犬やきょうだい犬と過ごすことは重要です



59日目（委託式）

前期社会化を終え、委託式に臨みます。ずいぶん顔つきも体もしっかりとしてきます



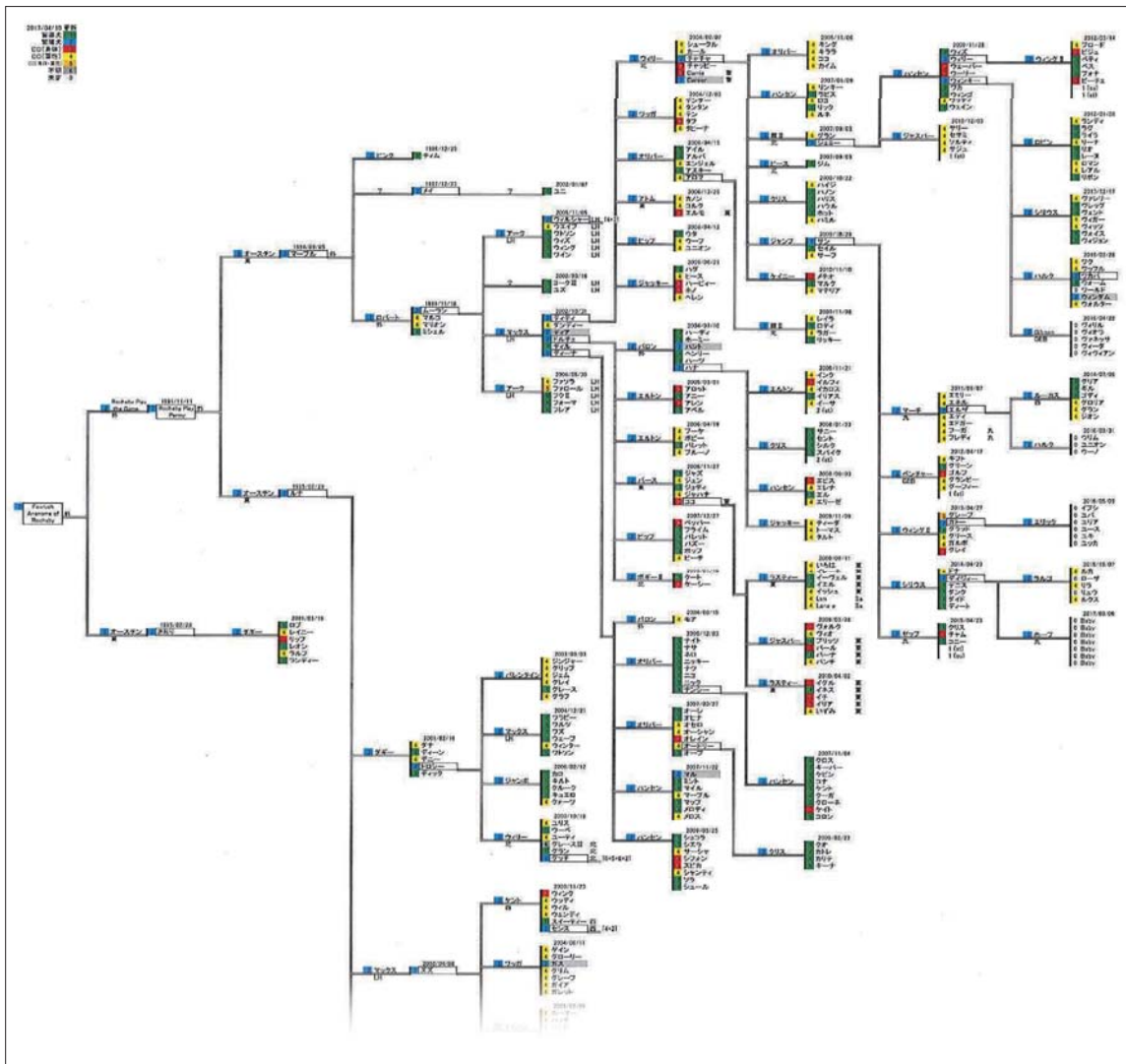
盲導犬の犬種の変遷

かつて盲導犬といえば、^{せい かん}精悍な風貌を持つジャーマン・シェパードが中心でした。しかし、周囲へ威圧感を与えるなどの理由もあり、徐々に減っていき、現在はラブラドル・レトリバーやゴールデン・レトリバーなどが中心に活躍しています。たれ耳で、アーモンド型の目をしたレトリバー種は、もともと狩猟犬としてブリーディングされた犬種で、親しみやすい風貌と人と行動するのに適した資質との両方を併せもっています。

盲導犬に適している性格には次のようなポイントがあげられます。

- 陽気で、他の動物や人に対して友好的である
- 人を喜ばせること、人と一緒にいることが好きである
- 他の動物に強い関心を示さず、挑発的な行動をしない
- 神経質でなく、攻撃的でなく、過剰な支配欲を持たない
- 集中力と積極性にすぐれ、環境への順応力がある
- 警戒心が強くない
- 落ち着いた動作で作業することができる
- 乗り物酔いをしにくい
- ^{はいせつ}排泄習慣が身につけやすい など

これらのポイントから見ても、ラブラドルやゴールデンなどに代表されるレトリバー種は、盲導犬としての稟性が高い犬種です。現在、当協会では、ラブラドル・レトリバーを中心に、ゴールデン・レトリバーを加えた2種の純血犬を盲導犬として繁殖・育成を行っています。かつてはラブラドルとゴールデンのミックスを盲導犬にしていたが今はしていません。純血2種とミックスの血統管理が必要となり、血統管理が



あるメス犬を中心にした犬の家系図の一部。すべての犬の血統を協会で管理しています

複雑で難しくなるからです。

また、盲導犬訓練技術の向上や多様なユーザーの歩行特性や希望に応えるため、ジャーマン・シェパード、ホワイト・シェパードやバーベイ（プードルの原種）など、他犬種の開発、訓練にも取り組んでいます。

盲導犬になるための稟性を持つレトリバー種ですが、純血種にはレトリバー種に特有の遺伝性疾患があります。遺伝性疾患は子犬に遺伝することが考えられますので、繁殖犬には選定基準を設けています。この基準はAGBN加盟団体で共有されています。

1. 遺伝性整形外科疾患

股関節形成不全 OFA 7段階 基本Good以上

肘関節形成不全 NP・Grade1~3の4段階 基本NP、G1も可

膝蓋骨脱臼 NP・Grade1~4 基本NP、G1も可

※検査は、NPO法人日本動物遺伝病ネットワーク (JAHD Network = Japan Animal Hereditary Disease Network) に依頼

2. 眼検査

遺伝性白内障、網膜異形成は症状により繁殖犬から外す検討をする

※検査は、比較眼科学会獣医眼科専門医に依頼

3. PRA (汎進行性網膜萎縮) 遺伝子検査

正常・Carrier・罹患の3段階 罹患は外す

※検査は、アメリカ検査会社に依頼

4. ブルセラ検査→陰性

※検査は、帯広畜産大学に依頼

当協会ではしっかりとした繁殖管理を行っているため、アメリカの動物整形外科協会 (OFA) の評

価ランクで「Fair」以上に該当する犬が2012年(平成24年)に100%を達成しました。なお、一般家庭犬の股関節形成不全 (CHD = Canine Hip Dysplasia) 罹患率は2001年46.7%との報告があります。

社会化を学ぶパピーウォーキング

生後2か月から1歳頃までがパピー期です。この10か月間ほどを、パピーはパピーウォーカーと呼ばれるボランティアの家庭で過ごします。これがパピーウォーキングと呼ばれる、パピーの社会化に欠かせない時期です。

パピーの間は、ボランティアのご家族の愛情に包まれながら、人と一緒に過ごすことの楽しさと喜び、そしてそのために必要な人間社会で暮らすためのルールと盲導犬のパピーとしてのふるまいを学びます。

パピーウォーカーが、パピーウォーキング修了までに教えることは、次の4つです。

[1] 人の言うことを聞く姿勢を持つ

次の3つができることが目標です。

①名前を呼ばれたら振り向く

②「グッド」と言われたら尻尾を振る

③「カム」と言われたら来る

[2] 人間社会のルールを覚える

どういうときにはめられるか、どういうときに叱られるか、をパピーに教えています。パピーウォーカーの一貫した態度が大切です。

[3] 「ワンツー」の声かけで排泄をする

いつでも、どこでもできることが目標です。

[4] いろいろな物や環境に触れ経験する

注意事項や禁止事項は、「散歩中に人の指示なく排泄をさせない」「決められたフード以外の食べ物

OFA (アメリカ動物整形外科協会) の評価ランク

Excellent	エクセレント・優
Good	グッド・良
Fair	フェア・可
Borderline	ボーダーライン・疑いあり、要再検査
Mild Dysplasia	マイルド・軽度のCHD
Moderate Dysplasia	モデレート。中度のCHD
Severe Dysplasia	シビア・重度のCHD

※ Excellent、Good、Fair までが合格となる

を犬に与えない」「犬同士で遊ばせない」「犬におもちゃを与えたままにしない」「ソファや車のシートにさせない」「人と一緒にふとんで寝させない」「顔や手をなめさせない」などです。

現在、常時120頭前後のパピーがパピーウォーカーのもとで過ごしています。120家庭前後のパピーウォーカーにこうしたお願いをするのは、盲導犬に適した稟性を持った犬でも、このパピー期の過ごし方によっては盲導犬になれなかったり、なるためのハードルが高くなったりすることがわかってきたからです。

当協会は、パピーウォーカーを盲導犬づくりの同志として迎えています。したがって、当協会は、この10か月間をパピーウォーカーに任せきりにすることはありません。

パピーウォーカーへのサポートとして、訓練部門は毎月「パピーレクチャー」を開催し、その月齢に応じたパピーのトレーニングや飼育指導を行います。受講できないときは補習も行います。さら

に、委託後早い時期に「家庭での受け入れ状況の確認と指導」、4か月頃には「散歩と散歩時の排泄訓練の確認と指導」のために自宅訪問をします。8～10か月齢になると1週間の「パピー預かり訓練」を行います。

こうした指導の中で、パピーの早期社会化、早期学習、早期評価検証データ蓄積などを行い、問題点は早期に解決していきます。

また、パピー期には予防接種など医療的な対応もお願いしています。なお、オスは5～6か月齢になると去勢手術をします。メスの避妊手術は訓練犬になったときに行います。

2015年度は、パピーレクチャーを258回、家庭訪問指導を215回、2016年度は、パピーレクチャーを278回、家庭訪問指導を175回行いました。

毎月行うパピーレクチャーは盲導犬歩行指導員が長年かけて作り上げてきたプログラムを元に指導が行われ、「パピーウォーカーを1年すると、目



パピーレクチャーでは、ほめ方、抱き方、遊ばせ方など、きめ細かく指導しています



写真や図などを多用して説明しており、視覚的にもわかりやすい充実した一冊になったテキストです

をみはるほどの技能と知識を持たれる方」がいます。2017年4月には、その教科書ともいえる『パピーウォーキングテキスト』が完成しました。

テキストの内容は、「盲導犬について知ろう」「パピーとの生活の基礎知識」「犬と上手に暮らすには」「犬学」「月齢ごとの特徴と目標」など、充実したものになっています。

また、このプログラムを実施するための訓練士用の指導書も作成中です。

パピーウォーキングに関する当協会の独特な試みの一つに、島根あさひ訓練センターの「島根あさひ盲導犬パピープロジェクト（正式名：島根あさひ社会復帰促進センターにおける盲導犬パピープロジェクト）」があります（詳細は第3章第7節）。これは受刑者がパピーウォーカーになり、盲導犬候補のパピーを育てるという日本初の試みです。

盲導犬候補のパピーを、地域ボランティアと協力しながら育てていく動物介在の教育プログラムです。「信頼される喜び」「役に立つ喜び」「達成する喜び」を感じること、受刑者の社会復帰の促進が期待されています。また、パピーウォーカー不足を補い、盲導犬育成頭数増加にもつながる試みです。つまり、当協会（視覚障害者）、受刑者、地域のそれぞれ三者がともに支え合い、利益を得る「Win

ーWin」のプロジェクトと考えます。

2009年（平成21年）3月には3頭の第1期パピー、2017年（平成29年）3月には6頭の第9期パピーが飼育委託されました。これまでの委託総頭数は52頭です。2017年8月1日現在、うち、12頭が盲導犬、2頭が繁殖犬、2頭がPR犬となり、6頭が訓練中、6頭がパピーウォーキング中です。（第3章第7節164ページ参照）

このプロジェクトで、はからずもパピー期に盲導犬訓練士が深くかかわることになり、パピー教育に関する多くの知見が得られ、2014年IGDFセミナーではその成果を発表しました。パピー期の過ごし方が成功率、訓練期間の短縮に関連することが示唆され、これを契機に、パピーウォーカーには、パピーの教育に対して、さらに積極的に関与してもらうことになりました。

なお、パピーレクチャーなど一切しない育成団体もあります。

3 服従から教育へと変化する訓練スタイル

訓練犬は、1歳を過ぎるとパピーウォーカーのもとを離れ、神奈川訓練センター、仙台訓練セン

2か月目

好奇心旺盛でさまざまなものに興味を持ちます。自分のことが最優先の時期。落ち着いて抱っこ散歩ができるといいですね



3か月目

好奇心旺盛のまま恐怖心が芽生えてくる時期。何でも口に入れます。家以外の場所でも10秒集中して遊べるといいですね



6か月目

自我の芽生え、反抗期が始まります。そこでもシット・ウェイトができ、自宅ではワンツーコールに反応して排泄ができるといいですね



9か月目

視野が広くなり、状況を見分けて行動する時期。十分な運動が必要。人の足元で落ち着いて待機したり、お手などの得意技が自宅外でもできるといいですね



ター、島根あさひ訓練センターなど各地の訓練センターに戻ります。いよいよここから盲導犬になるための訓練が始まります。

稟性評価

当協会では、訓練に入る前の盲導犬候補犬に対して、遺伝疾患などに関する健康チェックとTA（テンペラメント・アセスメント）といわれる稟性テストを行います。このとき犬たちは、安心して暮らしていたパピーウォーカー宅からたくさんの候補犬のいる訓練センターに来たことで、環境の激変による大きなストレスを受けています。この状態で安定したパフォーマンスをすることはなかなか難しいはずです。

たとえば初めての環境で決められた場所をリードをつけて歩くといったテストを行うと、候補犬の中には不安や心配によるストレスで、それまで見せなかった稟性を現すことがあります。このときのパフォーマンスを一定の項目で評価するのがTAです。TAの項目には、「安定性」「一貫性」「感受性（体感、音感など）」「不安感」「興奮性」「興味（対象は犬、猫、食べ物、匂い、人など）」「攻撃性」「成熟度」などがあります。

TAは盲導犬に向いているか、向いていないかの初期評価です。

盲導犬の育成・訓練の変遷

TAによる稟性評価が終了すると、盲導犬になるための本格的な訓練が始まります。日本盲導犬協会では、常に動物福祉を尊重した育成と訓練を行っています。「ほめて育てる」「ゲーム感覚で訓

練する」ことで、犬に対して「人とかがわることは楽しい」という動機づくりから始め、作業へと転化し、「犬が作業を安定的に自発する」教育理論が、広義の「DE (Dog Education)」です。訓練の導入は、「シット・ダウン・ヒール・ウエイト・カム」などの基本的な訓練課目を使って、犬とのコミュニケーションを通じて信頼関係を築いていきます。この時期、非常に大切な訓練です。日常的に行うこの訓練を狭義の「DE」といっています。

以前は「つらく厳しい訓練に耐えて初めて立派な盲導犬ができる」という考え方が一般的で、犬に完璧な服従を求める育成・訓練が行われていた時代がありました。これは軍用犬や警察犬など、伝統的な使役犬育成の考え方から生まれたものです。この考え方に基づく訓練は、虐待に近いものだとわれわれは考えます。現在、当協会では服従訓練は全く行っておらず、「服従」という言葉は当協会の訓練用語として死語となりました。

また、日本の多くの人が盲導犬に抱くイメージは、「利口な犬が目が見えない人のためにその身を賭して仕える」というもので、人が勝手に犬を擬人化して生み出したものです。

当協会の盲導犬育成理論やそのもととなる理念の構築を中心となって行った、盲導犬育成統括責任者、多和田悟は「犬にはその行動要因のベースに、“快”に近づき、“不快”からは逃げようとする意識がある」と言っています。

犬は自分にいやなことはしません。また、今はいやだけれど将来のためにがんばろうなどとは考えません。逆に、楽しいこと、“快”につながることは、たとえそれが人にとって不都合であっても関

犬を知るための5つの法則



- 1 犬は明日のことを考えない
- 2 犬は後悔しない
- 3 犬はほめられるのが大好きである
- 4 犬は楽しませてくれる人が好きである
- 5 犬にはそれぞれ性格がある

※「犬と話をつけるには」より抜粋

係なく、喜びを感じます。盲導犬でもそれは同じです。多和田が語る「犬を知るための5つの法則」は、犬を理解する上で基本となる視点です。

調教から訓練、そして教育へ

「調教」とは、人が優位に立つことで犬を支配し、犬に服従を求めるもので、訓練士は「犬になめられるな」と言われ育ちます。「訓練」とは、その行動ができるようになるまで反復して練習することで、「教育」とは、個が持つ特性に応じてその特性を伸ばす活動です。以前の調教、訓練は人から犬への一方通行でしたが、「教育」では教える側（訓練士や盲導犬ユーザー）も盲導犬から何かを学ぶことができる、そんな相互作用を引き起こすことを大切にしています。

多和田は、犬に対しても「教育」を目指す、と常に語ります。

「そもそも私は、犬は考えることができる動物だという前提で犬にかかわっています。盲導犬を育成し、目の見えない人見えにくい人が歩行する上で必要な情報を犬を通じて提供する仕事にかかわって40年以上になります。その中で、犬自身が判断し、結果として横にいる人間の歩行の安全を確保する作業は、犬自身が行動を自発することと、選択肢の中から正しいと思うことを判断できる能力が養われていなければいけないという結論に至りました」

ただし、犬が考えるということは、人間のように思考した上で次にとるべき行動を決めるのとは違います。与えられた選択肢の中から選んだ行動が、犬自身にとって「快」となることが重要なのです。行動の結果が犬にとって満足できるものであれば、犬はその行動を継続的に、盲導犬としてハッピータイアを迎える日まで行うことができます。

当然、盲導犬も間違えることがあります。そのときには、訓練士や盲導犬ユーザーが「違う」ということをきちんと伝える必要があります。そうすれば犬は再び考え、次は正しい結果を求めて行動することができるようになります。単なる「NO」ではなく、「それは違うよ」という意味で「NO」を教えることが大切です。盲導犬には、間違えないことではなく、間違えたことを修正できる能力こそが求められるのです。

現在では、多和田の訓練理論を真に理解する訓練士たちが、犬の適性を見極め、その犬が盲導犬として働きを終える10歳になるまで、無理強いされことなくユーザーに寄り添い、その歩行を手

伝う喜びと誇り、つまり“快”の意識の中で生きていけることを目指しています。

こうした多和田の育成理論は、当協会の方針であり、盲導犬育成のためのスタンダードです。当協会の各センターでは、この理論と理念をしっかりと理解した訓練士や職員によって、具体的な訓練やそれにかかわるいろいろな取り組みが日々行われています。

具体的な訓練工程

基礎訓練は、人とかかわることが楽しいことを感じさせながら行います。まず、犬に「GOOD（グッド）」という言葉の意味を教えます。盲導犬訓練士に求められたことができたときに、「GOOD」とほめます。それを繰り返して「GOOD」という言葉は「楽しい」ことだと覚えさせます。

たとえば、「シット（座れ）」「ダウン（伏せ）」「カム（来い）」「ヒール（左につけ）」「ウェイト（待て）」といったコマンド（指示）を出し、そのとおりに行動できたら「GOOD」とほめます。

これが先ほど紹介した狭義のDEです。このDEは、訓練期間中は毎日、また盲導犬となった後にも日常的に行われます。厳しいというより、楽しい作業を使って、犬とコミュニケーションを通して信頼関係を築いていきます。

基礎訓練と平行して、誘導訓練を行います。これは街の中で視覚障害者を安全に誘導するための確な作業をする訓練で、タウンウォーク（Town Walk）と呼ばれています。

●角や段差を教える

ユーザーに角を教えるときは、壁などに沿って左に入り込んで止まります。段差を見つけたときは、下り段差はその直前で、上り段差の5センチメートル以内に前脚を乗せて止まって段差があることを伝えます。うまくできたら「GOOD」とほめます。

●障害物を回避する

看板や自転車、駐停車中の車、通行人など、道路上にはさまざまな障害物があります。これらの障害物を人と犬の幅二人分をしっかりと避けて歩くことができるように訓練します。また、白杖では高い場所にある障害物を発見することは困難ですが、盲導犬は高いところにある障害物も避けられるように訓練します。

●交通訓練

動いている車、バイク、自転車などに対して危険を察知し、進むか進まないかを犬自身が判断でき

るようにする訓練です。

●駅やエスカレーターでの訓練

ユーザーとともに、上手に電車やエスカレーターなどに乗る訓練です。また、駅のホームでの安全歩行についても繰り返し訓練します。

訓練はPersonalベースではなくTaskベースで

盲導犬の基本的な訓練課題は、犬が「角や段差、障害物」を見つけ、それをユーザーに伝えることです。これを犬自身が学び、最終的には作業を自発的に行うようにすることが大切だと、当協会は考えています。

盲導犬の場合、訓練を行う人（訓練士）と実際に使う人（盲導犬ユーザー）が異なっています。多和田は「盲導犬の訓練では、使う人の違いが犬のパフォーマンスの違いとなりうるPersonal（パーソナル：人への親和）ベースではなく、Task（タスク：課題）ベースでなければならない」と考えます。

Taskベースとは、犬がやるべきことを理解し、指示した相手が誰であれ、そのTaskを行うことに達成感と喜びを持てるようにすることです。その

人が好きだから作業をするというPersonalベースでは、もし相手を嫌いになると作業ができなくなってしまいます。Taskベースであれば、好き嫌いではなく、この作業は「しなくてはならない作業かどうか」によって、するかしないかが決まってくるのです。

では、盲導犬はなぜ、教えられた作業をするのでしょうか。

これには、動機に基づく根拠が必要と考えます。そうしなければ、成功を続ける、つまり正しい行動をとり続けることはできないからです。この動機は「犬自身の快」で、根拠は「それを行う理由」です。

犬の行動が正しい根拠に基づいているかどうかで、「信用のおけるパフォーマンス」なのか、それとも「信用のおけないパフォーマンス」なのかが決まってきます。ある行動をすると、人が笑顔になり、必ずやさしい言葉をかけてなでてくれる。それをうれしい、つまり「快」と思える犬が、求められた行動をこの「快」と関連付けることができたとき、根拠がある行動が生まれるのです。

そして、指示語と「快」の感情を関連付け、人の指示でいつでも再現できるようにしていくことが



障害物を回避する訓練



バスの乗降訓練

訓練です。

その過程では「作業の紹介」「強化」「トライアル&エラー」「ネガティブサポート」と進み、学習を固定していきます。

●作業の紹介

たとえば、段差を通過する際、歩行速度を落とし、直角に侵入し指示語「カーブ」を聞かせます。同時に足裏で音を立てて、指示語との関連付けを行うのです。

●強化

犬が段差で自発的に停止するようにするために、最初は訓練士が完全に犬を止めます。その後は、徐々に止めるレベルを弱めていきます、最終的には、犬が自発的に停止できるようにします。

●トライアル&エラー

犬が自分で判断し、自信を持って停止ができるかを確認する過程です。訓練士の「ここで止まりなさい」という指示から、犬が自発的に停止し、逆に訓練士が「何で止まったのか？ 段差だったのだ」と気づくレベルに進みます。

●ネガティブサポート

トライアル&エラーをクリアした犬、つまり段差停止の作業に自信を持っている犬に対して、犬が止まろうとしたら間違った「ゴー」の指示を与えます。ネガティブサポートは、その指示を無視して段差で停止できるようになるレベルです。

テストによる作業評価

こうしたさまざまな訓練の成果を判断し、盲導犬としてユーザーに対し安全で快適な歩行を保証するために欠かせないのが、計3回の評価です。これがTP (Task Performance) と呼ばれる評価テストです。評価は厳しく厳正に行われます。

●1回目の評価：TP1 (Task Performance 1)

担当訓練士がアイマスクを装着し、基礎訓練と街での誘導訓練の両方をチェックします。きちんと障害物を避けることができたか、角や段差をきちんと教えられたか、などを細かく確認します。この評価をTP1と呼んでいます。一般的に訓練を始めてから、3か月の時点で行われます。

TP1では、訓練の習熟度だけではなく、訓練士の力量、犬の稟性や成熟度などの評価も対象となります。犬の稟性的な限界を見極めて訓練を継続するかキャリアチェンジするかの判断を下します。

●2回目の評価：TP2 (Task Performance 2)

TP2では、担当訓練士ではなく別の訓練士がアイマスクをして、公共交通機関での移動が含まれ

る、犬が歩いたことのないコースを歩きます。誰の指示でもきちんと従うことができるか、複雑な環境で安定したパフォーマンスができるかを確認します。この評価をTP2と呼んでいます。一般的に訓練を始めてから、6か月の時点で行われます。

TP2の時点で安定的なパフォーマンスを示した訓練犬は、共同訓練の時期や待機者（申請が終わり、盲導犬の貸与を待っているユーザー候補）とのマッチングを考えることになります。

訓練の習熟度だけでなく、稟性的な限界を見極めるとともに、どのような待機者に向いているのかの評価も行われます。

●3回目の評価：TPQ (Task Performance Qualified)

TP2をクリア後、2か月で行われるのがTPQです。対象になる待機者との歩行を想定し、訓練成果を確かめる最終評価です。TPQでは、ユーザーとなる待機者に合わせた最終調整を行う機会となります。このTPQという評価を行っているのは日本では当協会だけです。

当協会では、この評価を基にTA終了=TP1犬→TP1合格=TP2犬→TP2合格=TPQ犬→TPQ合格=Q犬と訓練犬にステータス名をつけます。訓練犬は、日々行われた訓練記録、TA、TPの評価は点数化され、さらに13項目のマッチング評価を行いデータベースで管理されます。

評価テストをクリアできず、盲導犬には向かないと判断された犬は、キャリアチェンジします。一般の家庭犬、盲導犬の普及活動などでデモンストレーションを行うPR犬、介助犬、セラピー犬などになります。

盲導犬とユーザーとのマッチング

盲導犬を希望する方は、ユーザーサポート部が窓口となります。盲導犬のこと、盲導犬との生活などについて正確に知っていただくために、盲導犬との体験歩行や1泊2日の説明会などを段階的に行って、盲導犬の申請書が提出されると、共同訓練年間計画書に名前が登録されます。この計画書は毎月更新されます。

現在は、年度初めの4月1日には年間計画50人のうちほとんどの方の名前が登録されます。そして、共同訓練予定の4か月前頃には、担当歩行訓練士が決まります。担当訓練士は、ユーザーサポートからの事前情報に加え、自らが共同訓練予定者の自宅に伺い共同訓練生としてのアセスメントを行います。その上で、施設の訓練責任者と話し合い

マッチング犬を選定します。施設内に適した犬がない場合は、他の3施設からマッチング犬を探します。そうした調整は神奈川の訓練責任者が他施設の責任者と行っています。

マッチング犬はTPQ犬かTP2犬から選ばれ、担当訓練士は、ユニットの歩行や生活を想像しながら、犬をカスタマイズしていきQ犬に仕上げます。

ユーザーとの共同訓練

いよいよ共同訓練の始まりです。視覚障害者が自分のパートナーとなる盲導犬と生活し、一緒に歩くための訓練です。

盲導犬歩行訓練士は、自らがカスタマイズ訓練をしてきた犬を用意して共同訓練に臨みます。実は、何かあったときのために、もう1頭バックアップ

のQ犬を決めておきます。

共同訓練生は各訓練センターに宿泊し、盲導犬から歩行情報をとる訓練、その情報を分析し判断する訓練を、街の中を盲導犬と歩く訓練をしながら体得していきます。道路横断、信号判断、繁華街歩行、交通機関やエスカレーターの利用や飲食店の利用の仕方などがあります。また、排泄や給餌など犬の世話、健康管理の仕方についても学びます。

歩行指導員は、事前に歩行指導計画を立て、さらに1週間ごとの訓練目標を立てます。そして、1日の訓練開始時には、今日の訓練科目と目標を示し、1日の終わりにフィードバックが行われます。

こうした共同訓練記録は、エクセルとデータベースに記録します。共同訓練記録（エクセル）には、毎日の訓練のポイントと結果、共同訓練生の感

TPの評価中

一頭一頭のTPテストを管理しているデータベース

想が書かれています。そして、データベースには実施した訓練科目と評価を入力すると蓄積され、各訓練科目が複数回行われ最終評価となります。この評価が、日本盲人社会福祉施設協議会（日盲社協）盲導犬委員会が策定した訓練基準「盲導犬歩行指導計画」に定められた訓練が行われ、訓練結果が基準に達していることを証明するものです。

新規の方は4週間（週5日）、代替の方は2週間以上です。科目をクリアできない場合は補習・補講などを行い、訓練期間が延長されます。第6週間目に入った方もいますし、途中で断念される方もいます。

共同訓練最終日、「あなたは、この犬と8年後のハッピーリタイアまでともに歩いていきますか？1年以内に盲導犬出発式を開催します。開催するホテルまで、あなた一人の力で来られますね」と、訓練評価の発表の後に尋ねられます。

ご本人が成約しサインすると、「盲導犬使用者証」が渡されます。晴れて共同訓練の卒業、そして新しい盲導犬ユーザーの誕生です。

3種類のフォローアップ

共同訓練が終わると、盲導犬ユーザーと盲導犬との新しい生活が始まります。担当歩行指導員は、通勤や買い物など実際に使う道で、ユーザーと盲導犬との歩行を確認するフォローアップを行います。単に歩行の確認だけではなく、犬の落ち着き、排便状況など環境変化への対応を確認、また、獣

医や駅長、行政担当者へのあいさつをして、周辺環境も整えます。これが、直後フォローアップです。その後、1か月目、3か月目、6か月目、1年目、3年目と定期フォローアップが行われます。2016年度（平成28年度）は309回行いました。

そして、盲導犬取得後6か月から1年半の間に出発式が開催されます。前年度の盲導犬取得者を



出発式の式典で、盲導犬と歩く写真が入った参加証と盲導犬の名前が刺繍されたカラー（首輪）を受け取るユーザー。新たな門出を祝う井上理事長

マッチング表

ユーザーと犬の基本情報を管理しています

ユーザー基本情報					
氏名		(ふりがな) ○○○ ○○○			
		□□		□□	
新・代	性別	新規	頭数		男性
生年月日	年齢	19 △△年△月△日		△△歳	
視覚障害原因		網膜色素変性症			
失明時期		××歳の時に現在の視力になった。(左:0.02、右:0.01)			
見え方の特徴		中心が見えて周りがみえにくい。羞明、夜盲。			
取得動機		親のサポートを受けずに自由に外出したい。			
健康		身体的懸念	なし	精神的懸念	なし
飼育環境		2階建ての一軒家。両親と同居。正しい理解をしてもらうことで良い協力者となり得る。			
歩行状況		自宅周辺の散歩がメイン。その他、買い物、通院など。			
犬への要望		本人からの要望はない。			
特記事項		解離性○○症を患い、0000年～0000年まで□□□□□□していた。将来的にマッサージの仕事をする予定。			

犬基本情報					
犬名			○○○○		
犬種	性別	体重	ラブ	オス	23.5kg
父犬 × 母犬	生年月日	□□□□ × □□□□	△△△		
凛性			・喜求性の高さと意欲の高さが強み。 ・学習能力低い(柔軟性低い)が、ぶれない強さがある。 ・キャバが狭いため、混乱しやすく慌てやすい。		
作業性			・歩行速度3、推進力ある歩行ができる。 ・段差が得意であるが、角よりも優位になりやすく角の入り込みやや浅い。 ・慌てやすい性格のため発信管理が安定した歩行を作るポイントとなる		
生活面			・いたずら気質あり。ケージ待機、サークル待機得意。		
強み			・ルート歩行得意。同じ場所でも飽きずに何度でも歩行できる。 ・段差作業 ・歩行意欲の高さ		
弱み			・学習能力の低さ(柔軟性低い)。キャバの狭さによる慌てん坊な一面。		
メディカル			なし		
特記事項			なし		

共同訓練記録 (データベース)

詳細な情報を蓄積して最終評価します

共同訓練記録(エクセル)例

4 週あろうちの各週の目標を立て訓練に臨みます

第3週目＜目標:させたい作業をさせることができる。環境に関係なく一貫した対応が取れる。盲導犬の行動の意図が読み取れる。＞

	第1週目	月曜日	火曜日
	日付	6/26	6/27
AM	DE	自主練成果確認・生活の中でのDE	-
	DEポイント	1回の指示でsitする house(指示された場所へ行って伏せる)	-
	場所	センター南→新横浜	新横浜右側→プリンスペ2Fタリーズ
	訓練内容	①繁華街歩行・ウィンドウショッピング ②電車、ホーム利用	援助依頼
	ポイント	・注意の分散 ・基本動作の定着	注意の分散・いつでも左手への意識を持つ
PM	DE	自主練	-
	DEポイント	1回の指示でsit	-
	場所	新横浜→センター南	びっくり寿司
	訓練内容	①繁華街歩行・ウィンドウショッピング ②電車、ホーム利用	夜間歩行 ソロで歩行
	ポイント	・注意の分散 ・基本動作の定着	見え方の違いによる歩行への影響 基本動作の定着
	その他		13:30-ユーザー会案内 14:30-シャンプー
	結果と所感	【人】 ・駅構内一目的地の改札を自分で看板を見ながら行ってもらった。方向転換時は一旦止まる、看板を見たいときは止まって犬を座らせて見る、考えながら歩き出すことができ、犬の集中もよく保っていた。 ・自主練の成果がよく出ており、外出中でもsitがスムーズになってきた。 【犬】 ・人が右側を注視すると右側に引かれ、流れてしまうことあり。	【人】 ・人と並んで歩くときも、方向指示などを基本通りできていた。広い歩道で並んで歩いている時に、犬が寄りたがっていたことに気付いたがどう対応すべきかわからず、犬に沿わずに犬との距離があくことがあった。 ・犬がなかなか座らない場面があったが、犬に意識を向ける姿勢は常にあった。 ・夜よりも夕方から夜にかけての明るさだと「見えていると思って見えてない」状態で夜より歩きづらかった。 【犬】 ・援助依頼で歩行時、人との距離があいても寄りを優先させられていた。後半反発心から匂い嗅ぎあり。
	ユーザー感想	エスカレーターの乗降で少しタイミングが合わないところがありましたが、慣れれば問題ないと思います。 駅やビルなどの人が多いところもスムーズに歩く事が出来て良かったです。 階段の最初の段に上肢を乗せる、階段の途中から斜め右に向いてしまう事も、動作を分解して練習をすればできると思いました。 (思い返すと今朝から、やや階段に行きたがらない予兆があった気がします。) 自分が右を見ながら前方に歩いている時に、右に傾いている事も分かって良かったです。 1人で歩いている時よりも、よりルートを意識するようになったので、帰り道に迷いにくくなるような気がします。	援助依頼は、声を掛けることより、その後の方が難しいと感じました。 (人について歩く際に左寄りに歩道の真ん中を歩くようになる点) 声を掛けて話をしようとしても、なかなか犬が座らず、話をしながら少し焦りました。 自宅へ戻って道を聞くという場面はほとんど無いと思いましたが、駅や建物内または、店頭で係の人に声を掛けるときの参考になりました。 夜間歩行については、細かい段差でも止まってくれる事は昼間以上に歩く事に集中しなくても済むため、とても楽に歩けたと思いました。

対象に、自分一人の力で会場のホテルまで来ることがテーマです。これは共同訓練卒業時の約束です。担当歩行指導員は、無事に移動していることを陰から確認しながら待ち受け、会場に到着するとさっそく個別にフォローアップ訓練を開始します。

式典では井上幸彦理事長から、ユニットで歩いてきた写真をあしらった参加証と盲導犬の名前を刺繍したカラー（首輪）が贈られます。一人ひとりの口から「盲導犬との生活、変化、エピソード」が語られると、参加した支援者にえも言われぬ感動が湧き起ります。懇親会では、緊張から解き放たれたユーザーの笑顔が爆発します。1泊し、翌日は盲導犬訓練の基本を確認、自信をお土産に帰って行きます。出発式は4施設ごとに行っており、2016年10月に行われた神奈川訓練センターの出発式には20ユニットが集まりました。

当協会では、1年以内に安定したユニットになることを目指しています。

しかし、課題が出てくることもあります。ユー

ザーの視覚機能の変化、体調の変化、生活の変化などにも対応します。犬に問題が出てくるともありません。匂いとり、拾い食い、歩行拒否など、問題が発生する原因の多くは悪い学習や犬とユーザーのコミュニケーションの食い違いによるものです。ユーザー自らの訴え、ご家族からの訴え、またユーザーサポート部や普及推進部から情報がもたらされると、担当歩行指導員が対応します。これが問題解決型フォローアップです。2016年度は239回行いました。

3つ目がその他フォローアップです。主に犬の医療相談、飼育相談です。2016年度は106回です。

なお、2016年度は東京メトロ青山一丁目駅と埼玉県JR蕨駅、静岡県JR興津駅でユーザーが駅のホームから転落する事故がありました。3ケースとも当協会のユーザーではありませんでしたが、すべてのユーザーに2度電話をしてホーム上での歩行原則の確認を行い、不安のあるユーザーには問題解決フォローアップを行いました。

総数		110									
重要度別	ユニット名	担当	人		犬		使用状況	相互理解	計		
			心	体	行動	健康					
×	0									0	0
△	11									0	0
○	50										
◎	49										

担当者別月次管理表

氏名	犬名	犬年齢	地域	4月	5月	6月
1 ああああ	aaaa	7歳1ヵ月	東京	◎	◎	◎
2 いいいい	bbbb	6歳5ヵ月	東京	◎	◎	◎
3 うううう	cccc	5歳3ヵ月	神奈川	◎	◎	◎
4 ええええ	dddd	4歳10ヵ月	長崎	◎	◎	◎
5 おおおお	eeee	3歳2ヵ月	神奈川	◎	◎	◎
6 かかかか	ffff	4歳3ヵ月	福岡	◎	◎	◎
7 きききき	gggg	2歳11ヵ月	東京	◎	◎	◎
8 くくくく	hhhh	2歳2ヵ月	千葉	◎	◎	◎
9 けけけけ	iiii	2歳0ヵ月	神奈川	◎	◎	◎
10 ここここ	jjjj	9歳11ヵ月	神奈川	◎	◎	◎
11 ささささ	kkkk	9歳8ヵ月	神奈川	◎	◎	◎
12 しししし	llll	7歳0ヵ月	神奈川	◎	◎	◎
13 せせせせ	mmmm	5歳10ヵ月	東京	◎	◎	◎
14 そそそそ	nnnn	5歳2ヵ月	埼玉	◎	◎	◎
15 たたたた	oooo	4歳10ヵ月	神奈川	◎	◎	◎
16 なななな	pppp	4歳2ヵ月	神奈川	◎	◎	◎
17 にににに	qqqq	4歳2ヵ月	茨城	◎	◎	◎
18 めめめめ	rrrr	3歳10ヵ月	埼玉	◎	◎	◎
19 ねねねね	xxxxx	2歳10ヵ月	茨城	◎	◎	◎
20 のののの	yyyyy	2歳6ヵ月	東京	◎	◎	◎
21 はははは	zzzz	2歳0ヵ月	東京	◎	◎	◎

総評	定義
18~24	× ユニット存続が困難であり、早急な対応を必要とする。
12~17	△ 問題があるユニットであり、解決しなければユニット存続が危うくなる状態である。
9~11	○ 現状維持可能なユニットであるが、問題発生に対してはサポートが必要である。
6~8	◎ 充分に自立したユニットであり、定期的な評価で維持向上することができる。

フォローアップ管理表
問題解決を目指すだけでなく、ユニット状況もひと目で把握できます

盲導犬ユーザーからの問い合わせ電話や、協会からの通信履歴などはすべてコンタクト履歴としてデータベースで管理しています。そして、ユーザーサポート部などからもたらされたユーザー情報はすべて訓練責任者に集められます。また、各センターの歩行指導員からは月次の担当ユーザーの評価が提出されます。それらは、月1回ユーザー月次報告とフォローアップ管理表にまとめられます。

盲導犬ユニットは、人（心と体の健康）、犬（行動と健康）、使用状況、相互理解の6項目で評価し、点数化します。担当者は点数等状況を判断して問題解決フォローアップを計画し、実行します。定期フォローアップを実施すると「定」、問題解決フォローアップは「問」と表に入れます。



医療と科学で 質と量をアップ

当協会は、健康な盲導犬を育成するために、また、盲導犬の一生に責任を持つために、必要な場面場面で決められた検査、診察や治療、予防注射など医療面からのアプローチも欠かしません。対象となるのは、盲導犬だけでなく、繁殖犬、パピー、引退犬までが含まれます。こうした細やかな医療対策が品質向上につながっていると信じています。

各年代での医療管理

●パピー

生後5か月までに、3回の混合ワクチンと狂犬病予防接種をすべてのパピーに実施しています。また、パピーウォーカーから健康状態や食事内容に関する報告を受け、体調不良が見られる場合にはアドバイスを行うだけでなく、直接訪問したり、当協会の医療室で診察もします。

●訓練犬

訓練センターに戻ってきた時点で、眼底検査、股関節のレントゲン検査、心電図、血液検査、耳・皮膚などのチェックといったメディカルチェックを行っています。その他、混合ワクチンや狂犬病予防接種、フィラリア予防薬、ノミ・ダニ駆虫薬など基本的な健康管理はもちろん、シャンプーやグルーミング、歯磨き、体重測定も欠かせません。

また、犬の性格を把握した上で犬室の割り振りなど綿密な犬舎管理を行い、ストレスの少ない生活ができるようにしています。2009年には、神奈川訓練センターの犬舎を適度な換気を行えるように改修。これは犬の免疫力アップや健康維持を実

現させるための取り組みです。

なお、Q犬に認定されると、マイクロチップを埋め込みます。

●繁殖犬

繁殖犬候補の犬には定められた遺伝性疾患の検査を行い合格した犬を繁殖犬として登録します。繁殖犬に登録された後も定期的に検査をします。そして繁殖雌犬の出産時には、万全の検査体制で臨みます。担当職員は、繁殖犬飼育ボランティアの力を借りて体重管理や適度な運動などを行い、常にベストな健康状態を保つ努力をしています。

それでも、生まれてきた子犬に疾病が見つかる、遺伝に由来する疾病か検証します。遺伝由来の疑い大きいと繁殖犬から外す決定が下されます。

●盲導犬

盲導犬ユーザーには毎年、狂犬病予防接種、混合ワクチン接種、フィラリア予防、ノミ・ダニ駆除を実施していただき、その報告書を獣医師の診断書とともに提出してもらいます。また、ユーザー自身が行う日頃の食欲、排泄の状態、ブラッシングの際に異常がないかなども、担当職員が把握しデータ化しています。常に、一頭一頭の健康状態を確認し、何かあればすぐに対応できる体制を整えています。

●引退犬

引退犬の健康管理は引退犬飼育ボランティアにお願いしていますが、何かあればいつでも相談できる体制を整えています。また富士ハーネスで暮らす引退犬たちにも、医療設備が整った施設で健康チェックを行っています。

健康管理体制と医療サポート体制

犬舎には、獣医療看護師資格の取得者や、協会内で勉強会をして資格に相当する実力を持った職員が日々の飼育に携わっています。ケネル担当の職員の合言葉は「盲導犬は犬舎からつくる」です。

日々の健康管理では、一頭一頭の排便の記録が登録され、日々のグルーミング、歯磨き、歩行の観察から病気の早期発見などを行っています。犬舎内で行ってもよい治療範囲は決められており、これを「0.5次医療」と名付けています。経過観察により治癒傾向にないと判断されると、協会内外の獣医師による治療（1次医療）が施されます。

時に、重篤な症状の犬の情報が入ってきます。重篤情報は直ちに訓練部管理長に上げられ対応指示が出ます。獣医療協力協定を結んでいる東京大学、

日本獣医生命科学大学、麻布大学などの病院へ移送され、治療が行われます。これが2次医療です。

こうした医療体制は、訓練センター内だけではなく、ユーザー、ボランティアにも開放しています。各センターにはユーザーホットライン、ボランティアホットラインがあり、24時間緊急対応をしていて、急病や事故等の相談窓口になっています。

2017年(平成29年)3月末現在、協会の所有犬は677頭です。医療データベースで1頭1頭、予防接種歴、手術歴、治療歴等を管理し、正に盲導犬の一生に責任を持つ体制を整えています。

しかし一方、犬の治療費は健康保険がないためユーザー、ボランティアに負担をかけていました。そこで、協会の医療費一部負担基準を決め、どの犬も過不足なく治療が受けられる体制をとりました。犬の高齢化に伴い、がんなどの重篤な病気も多くみられ、2次医療費は協会の治療方針に基づき協会が負担するケースもあります。

また、盲導犬総合支援センターに依頼しフード支援システムを作りました。基本フードを定め、ほぼ仕入れ原価でご自宅にお送りするものです。このシステムでは、送料実費と基本フードとの差額を協会が補てんしています。これは指定フードの使用や処方食と呼ばれる特別療法食の使用をお願いするためでもあります。フードのストックも、東

日本震災の経験から残り半月分になったら注文してもらうようお願いしています。

さらに、キャリアチェンジ犬にもフード支援を行ったり、飼育相談にも関わっています。キャリアチェンジ後の健康情報をいただき、繁殖情報、キャリアチェンジ判断の適否情報などに生かしています。

最新の研究からのアプローチ

当協会では、盲導犬のさらなる質の向上を目指して、近年、科学的なアプローチの幅を広げています。大学などの研究機関や専門家、AGBNと協力して、盲導犬をとりまく課題を科学的に調査研究し、盲導犬育成に反映させるべく、努力を続けています。

現在、当協会が行っているアプローチには次のようなものがあります。

- 盲導犬の適正や早期稟性判断に関する研究
- 盲導犬の早期適性予測に関する行動遺伝学的研究
- 盲導犬に適した資質に関する遺伝的研究
- 育種価を使った盲導犬適正率向上組み合わせ研究
- 低体重新生子犬に対する哺乳方法
- スキムミルクを使用した凍結精液作成技術導入
- 盲導犬ゲノム解析や家系と共通疾患研究

日本盲導犬協会所有犬頭数

	頭数	訓練センター内飼育				ユーザー・ボランティア飼育			
		神奈川	仙台	富士宮	島根	神奈川	仙台	富士宮	島根
パピー	108					51	25	16	16
訓練犬	69	26	19	11	13				
繁殖犬	オス	16				16			
	メス	34				34			
盲導犬	オス	118				47	31	20	20
	メス	114				60	24	20	10
引退犬	191					130	35	18	8
PR犬	27	3	1	4	4	8	6	1	
合計	677	29	20	15	17	346	121	75	54

2017年3月31日

5

革新的なデータ管理で
犬情報をすべて把握

これまで紹介したように、当協会は「良質な盲導犬」の育成を目指し、繁殖から出産、パピー、訓練犬、盲導犬へとその育成過程の中で独自の取り組みを数多く行ってきました。そして、もう一つ大きな挑戦は、2007年（平成19年）からスタートした革新的なデータ管理「訓練部データベース」です。そして2016年に追加構築し、現在は「基幹システム」として運用しています。

基幹システムは、「犬基本情報」を中心に「出産記録」「幼犬飼育記録」「母親犬飼育記録」「犬飼育情報」「医療履歴」「TP日誌」「TPテスト」など、犬および犬の訓練に関する31項目の情報がユーザー情報と結びついたデータベースで構成されています。各データベースには、日々のデータ情報が入力され、各犬の最新情報が常にわかる仕組みになっています。親犬の情報から、日々の訓練状況、TPテストの成績などをすぐに知ることができます。

そして、各盲導犬候補犬は生まれたときから死亡するまで、常にステータス管理されます。

当協会のステータス管理では、生まれると「幼犬」としてステータス登録が行われます。そこから

「パピー」、訓練所に入ると「TP1犬」、TPテストに合格すると「TP2犬」「Q犬」、そしてユーザーに貸与されると「盲導犬」に、引退すると「引退犬」へとそれぞれの段階でステータス変更が行われます。他にも、キャリアチェンジした「CC犬」や「PR犬」、「繁殖犬」などのステータスがあります。

このデータベースができる前は、繁殖担当者や訓練士などが、個別に情報を持っていましたが、経験や記憶という部分に頼る面がありました。そのため、たとえば訓練なら、現在どんな訓練をどこまで行い、その進捗状況はどの程度か。またTPテストの評価はどんな状態なのかなどは、個別に訓練士に聞かなければわかりませんでした。この問題点を解決するために作られたのが、この基幹システムです。

現在、膨大な訓練に関する記録、犬の稟性評価、健康情報を管理しています。そして、このデータベースを使って、TPの点数を何点以上に上げることができるか、期間をどれだけ短縮できるかなどの検討を進めています。

このデータベースは盲導犬ユーザーの状況の把握にも利用され、盲導犬候補犬とのマッチングや共同訓練、ユーザーとなった後のフォローアップにも利用されています。詳しくは第1章第4節78ページで紹介します。🐾

犬のステータスと評価テストの流れ

